The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『懐徳堂会餞詩巻』訳注 ： 中井履軒京都行の送別詩
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	中国研究集刊. 2003, 34, p. 68-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61182
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　陽号（総34号）平成十五年十二月　六八―七八頁

『懐徳堂会餞詩巻』訳注

―中井履軒京都行の送別詩

湯城吉信

懐徳堂文庫に『懐徳堂会餞詩巻』と題する軸物が残されている。これは、中井履軒と中村両峰の京都行の送別の詩を集めた巻物である。明和三年（一七六六）十一月、履軒（当時三十四歳）は中納言高辻胤長に、中井竹山の門人で履軒の後妻（一七七九年に再婚）の兄である中村両峰（当時二十六歳）は白木屋にそれぞれ招かれた。本詩巻は、その送別の宴での詩をまとめたものである。巻末に、竹山の跋文が附されている。

冒頭は、装丁前の破損があるが「懐徳書院宴集」と推測できる。作者は、収録順に、三宅正誼（春楼）、早野辨之（士誉）、荒木喬（李谿）、三宅光同（西海）、古林相如（槐菴）、加藤景範（竹里）、原存之、竹島素房、金崎元永、中井竹山の十人。韻を分けて作った詩が自筆でしたためられている。早野辨之（士誉）が三首贈っている以外は、各自、一首ずつ（ただし、相如の詩は竹山による代作。『奠陰集（詩集）』巻二参照）。他、跋文によると、約束していて欠席した人が数人いたという。「蘭亭集序」に倣って、跋文では、参加者を紹介している。

内容は、別れを惜しみながらも、二人の出世を祝うものが多い。例えば、早野辨之は「双龍不留一、同入九重雲（二匹の龍は一匹も留めず、共に九重の雲（天子の居所）へと去って行く）」、加藤景範は「英豪欲振皇京学、莫道区々東野鳴（英傑が都の学問を振るわさんとしている、せせこましく田舎で鳴いていると言うなかれ）」と表現している。また、竹山は「寄語洛陽才子羣、誰知傖父多声価（京都の才子たちにもの申す、誰が田舎者の値うちをわかってくれようと）」と詠う。京都への劣等感と懐徳堂の自負とを垣間見ることができよう。

結果、履軒は一年で帰阪した。京都での一年を題材に『洛汭奚囊』という詩集を残している。内容は、京都での孤独と大阪への恋慕とを詠うものがほとんどである。早野辨之（士誉）に贈る詩が五首あり、二人の親密な関係を知ることができる。

その他、竹山の『奠陰集（詩集）』には、履軒京都行に関する詩が多数ある。その中、送別の詩「孤雁歌　送処叔弟之京」は、履軒京都行に対する竹山の意識が、よりはっきりと表現されている。

以下、『懐徳堂会餞詩巻』全文に「孤雁歌　送処叔弟之京」を付録とし、それぞれ原文と訳注を載せる。

『懐徳堂会餞詩巻』

＊署名は原文では詩末にあるが、詩題の次に移した。

□□□□（懐徳書院）宴集送処叔君彝之京　同賦得飛字　正誼

（懐徳書院に宴集し、処叔・君彝の京に之くを送る。同じく賦して飛字を得。）

＊君彝は中村君彝。履軒の後妻の兄。竹山著『奠陰集（文集）』巻九に「中村君夷墓誌銘」がある。それによると、君彝は、元文五年（一七四〇）に生まれ、天明二年（一七八二）に亡くなった。京都行当時二十六歳ということになる。号の両峯は、出身地の平野郷から見える二上山に因む。

＊正誼は三宅氏。三代目懐徳堂学主。生没年一七一二～一七八二（当時五十四歳）。

華城一夜故人違　　華城　一夜　故人違り
百里扁舟即帝畿　　百里　扁舟　帝畿に即く
山擁平安寒色甚　　山　平安を擁きて　寒色　甚し
明朝応詠雪花飛　　明朝　応に雪花の飛ぶを詠むべし

（訳）ある夜、旧友が大阪を去り、百里を小舟で都に着く。山は都を包み込んで寒々とする。明日の朝は雪が舞うのを詠むのだろう。

同賦得君字二首（同じく賦して君字を得　二首）

辨之

＊早野氏。一人、三首の詩を詠む。『洛汭奚囊』にも辨之あて

の詩が五首（三首は連作）見える。荒木喬の注参照。生没年一七四六～一七九〇（当時二十歳）。

哀鴻兼落木　哀鴻　落木に兼ぶ
豈忍別時聞　豈に別時に聞くに忍びんや
一夕高堂燕　一夕　高堂に燕し
詎図送二君　詎ぞ二君を送るを図らん

（訳）悲しげに鳴く雁が冬枯れの木に並ぶ。どうして別れの時に聞くに耐えられようか。ある夕べ、屋敷で宴を開き、どうして二君を送ることを予想し得よう。

双龍不留一　双龍　一も留めず
同入九重雲　同じく九重の雲に入る
此夜江南酒　此の夜　江南の酒
觥船偏勧君　觥船　偏えに君に勧む

（訳）二匹の龍は一匹も留めず、共に九重の雲（天子の居所）へと去って行く。今夜江南（大阪）の酒を、大きな杯でひたすら君に勧める。

同得庚韻（同じく庚韻を得）　喬

＊荒木氏。後、李谿と号す。池田の人。『奠陰集（文集）』巻七「与紀世馨」（一七七三）に「吾詩社中巨擘」と評す。『奠陰集（詩集）』巻四「与伯遷士誉訪寿王、混沌社中諸君在座、分韻同賦得七虞」によると、安永二年（一七七三）、荒木喬（伯遷）は士誉（既出の早野辨之）とともに混沌社（当時大阪で有名な詩社）を訪れている。二人は懐徳堂を代表する詩人であったか。生没年一七三六～一八〇七（当時三十歳）。『池田人物誌』下（吉田鋭雄他編、太陽日報社、大正八年）に詳しい伝記がある。

残歳風流少　残歳　風流少なく
高堂喜旧盟　高堂　旧盟を喜ぶ
窮驩皆好事　驩（よろこ）びを窮むるは　皆な好事
縦飲半離情　縦（ほしいまま）に飲み　離（わか）れの情を半ばにせん
雒水双鳧去　雒水　双鳧（そうふ）去り
華洲一雁鳴　華洲　一雁　鳴く
誰憐分袂後　誰か憐まん　袂を分かつ後
氷雪臥柴荆　氷雪　柴荆に臥するを

（注）＊双鳧・文字通りにはつがいの鴨。ただし、後漢

の王喬の故事より地方官の代名詞としても用いられる（『後漢書』「王喬伝」）。

（訳）今年も残り少なく楽しみもあまりなかったが、（今日）お屋敷で旧交を温める（幸せに恵まれた）。歓びを尽くすことは結構なことだ。心ゆくまで飲んで別れの情を半減させよう。京都へつがいの鴨が去り、大阪で一羽の雁が鳴く。誰が憐れもう、袂を分かった後、雪の中、柴（あばら屋）で臥すことを。

同賦得楓字（同じく賦して楓字を得）　光同

＊三宅氏。春楼の子。

凋落階前楓　凋落す　階前の楓
哀鳴天上鴻　哀鳴す　天上の鴻
此時澱江南　此の時　澱江の南
蕭々別両雄　蕭々として　両雄と別る
一為東閣賓　一は東閣の賓と為り
孤剣辞桂叢　孤剣　桂叢を辞す
搢紳望陶鎔　搢紳　陶鎔を望み
徳業終恢洪　徳業　終に恢洪たらん
一慕碩人軸　一は碩人の軸たるを慕い
溪山鎮耽躬　溪山に躬を鎮耽す
都下定傾倒　都下　定めて傾倒し
辞藻益龍蹤　辞藻　益々　龍蹤たらん
此別何須嘆　此の別れ　何ぞ須く嘆くべけん
風流原不空　風流　原　空しからず
春花兮秋月　春花や　秋月や
預期飛詩筒　預期して　詩筒を飛ばさん

（注）＊東閣…「東閣を開く」で賢人を招くこと

（訳）階の前の楓は凋み落ち、天上の鴻は悲しく鳴く。この時、淀川の南で寂しく両雄と別れる。一人は賢人として抜擢され、孤剣が桂の草むらを辞す。貴人は教化に浴し、徳が広まるだろう。一人は偉人の中軸となろうとし、山水に身を沈める。都のうちはきっと心を寄せ、文才は益々盛んになるだろう。この別れはどうして嘆く必要があろう。風流はもともと空しくない。春の花に秋の月。時期を図って詩をやりとりしよう。

同賦得愁字（同じく賦して愁字を得）　相如

＊古林氏。『奠陰集（文集）』巻十に「槐菴先生壙誌」がある。古林家は名医として知られた（中野操『大阪名医伝』思文閣、一九八三年　参照）。

ただし、この詩は竹山の代筆らしい。『奠陰集（詩集）』巻二に、本集末尾の竹山の詩の後に「同前、代人得愁字」と題してこの詩がある。

秉燭蘭堂酒若油　燭を蘭堂に秉り　酒は油の若し
壮懐何用問離愁　壮懐　何を用て離れの愁いを問わん
公門将下周徐榻　公門　将に周徐の榻を下さんとするに
僊棹先浮李郭舟　僊棹　先ず李郭の舟を浮かぶ

（校勘）『奠陰集（詩集）』巻二では、「壮懐」を「高懐」に、「用問」を「問別」に、「周徐」を「周除」に作る。

（注）＊周徐…周除の誤り。周りの庭、階段の下。『文選』「月賦」に見える。除に庭、階段の意がある。＊李郭舟…後漢の李膺と郭太が舟を共にしたこと（『後漢書』「郭太伝」）。友人相親しむ喩え。「郭太伝」では二人が舟を共にしたことについて「衆人がそれを見て神仙だと思った（衆賓望之、以為神仙焉）」とある。「僊棹（僊は仙に同じ）」というのは、この文句に基づくのであろう。

（訳）美しきお宅に燭をともし、酒はつやつや輝く。盛んな志には離別の愁いなど問う必要がない。公家様の家で床につく前に、まずは、仙人の棹を挿し、李郭の舟を浮かべる（親友が舟を共にする）。

同賦得鳴字（同じく賦して鳴字を得）　景範

＊加藤氏。通称小川屋喜三郎。薬屋。歌人。『奠陰集（文集）』巻十一に「竹里翁碑陰」がある。生没年一七二〇～一七九六（当時四十六歳）。

孤蓬寒月発江城　孤蓬　寒月　江城を発し
枯柳無由寄別情　枯柳　別れの情を寄すに由無し
英豪欲振皇京学　英豪　皇京の学を振るわんと欲す
莫道区々東野鳴　区々として東野に鳴くと道う莫かれ

（注）＊柳…古代中国では、別離の際に、柳の枝を折っ

てはなむけにした。

（訳）根無し草（一艘の舟）が寒月の下、水都を発す。冬枯れの柳には別れの情を寄せることもできない。英傑が都の学を振るわんとしている。せせこましく田舎で鳴いていると言うなかれ。

同賦得情字（同じく賦して情字を得）　存之

＊原氏。事跡未詳。

盍簪終夜飲　盍簪（こうしん）し　終夜　飲む
豈耐別離情　豈に別離の情に耐えんや
此夕休辞酔　此の夕べ　酔うを辞する休（な）かれ
明朝百里程　明朝は百里の程なれば

（注）＊盍簪…集まること（『易経』「豫卦」「九四」）。

（訳）集いて終夜飲み明かす。どうして別離の情に耐えられようか。この夕べ、酔うを辞さないで下さい。明朝は百里の旅に出るのだから。

同賦得詩字（同じく賦して詩字を得）　素房

＊竹島氏。事跡未詳。

北風蕭颯大江湄　北風　蕭颯たり　大江の湄（ほとり）
今夕琴尊惜別離　今夕　琴尊もて　別離を惜しむ
遙識孤舟清夜月　遙かに識る　孤舟　清夜の月
数声鴻雁喚新詩　数声　鴻雁　新詩を喚（よ）ぶを

（注）＊琴尊…琴は琴。琴と酒樽とで、文士の別れの宴のこと。

（訳）大川のほとりに、北風が吹きすさぶ。この夕べ、琴と樽とで別離を惜しむ。遙かに知る、澄んだ月の下、一艘の舟の中で、雁が数声、新しい詩を詠んでいるのを。

同得寒字（同じく寒字を得）　元永

＊金崎氏。医者。夫婦で中井蕉園と吉野に花見に行っている

（蕉園『騮碧嚢』参照）。没年はおそらく一八〇〇年または一八〇一年（『奠陰集（詩集）』巻八に「哭金崎子貞」詩がある。同詩は一八〇〇年または一八〇一年の作）。

霜飛月白北風寒　霜飛り　月白くして　北風寒し
詞客伝杯坐夜闌　詞客　杯を伝え　坐ろ　夜　闌
美酒千鐘須尽酔　美酒　千鐘　須く酔いを尽くすべし
猶余高館一宵歓　猶お余りあり　高館　一宵の歓

（訳）霜が降り、月は白く、北風は寒い。詩客が杯を交わしているうち、夜はそぞろ更ける。美酒は十分だ、酔っぱらおう。それでもお屋敷のこの一夜の歓びは余りある（＊酒の量より思いが勝ることを言うのであろう）。

邀諸友会餞　同賦得夜字（諸友を邀き会餞し　同じく賦して夜字を得）　積善

＊中井氏。履軒の兄。懐徳堂預り人（校務の責任者）。

書堂餞飲憐良夜　書堂　餞飲　良夜を憐しむ
剪燭吟詩飛玉斝　燭を剪り　詩を吟じ　玉斝を飛ばす
寄語洛陽才子羣　語を寄す　洛陽　才子の羣
誰知傖父多声価　誰か知らん　傖父　声価多きを
丙戌仲冬

（校勘）『奠陰集（詩集）』巻二では「吟詩」を「吟詠」に、「玉斝」を「醆斝」に作る。「醆」「斝」ともに杯。

（訳）懐徳堂で別れの宴を開き、月夜を惜しむ。燭を剪り、詩を吟じ、玉の杯を交わし合う。京都の才子たちにもの申す。誰が田舎者が値打ち高きことを知ろうか、と。

＊以下、竹山の跋。

觴咏娯楽、俛仰陳迹、是王右軍所以興懐。今也、吾君彝与弟処叔北遊京師、諸子文酒叙別惓々乎把袂之頃者、宜矣。況予同胞和楽且孺者乎。分字賦詩、要在写一時之情、不必争工於字句之間。随成随録、不遑序歯輯為小巻以贈二子。乃倣蘭亭之文、列叙其姓字以伝後之覧者矣。

觴咏娯楽するも、俛仰に陳迹となるは、是れ王右軍の懐いを興す所以なり。今、吾が君彝と弟処叔と北のかた京師に遊ぶに、諸子　文酒もて別れを叙べ　惓々乎として

袂を把ることの頃するは、宜なり。況んや、予　同胞たりて和楽し且つ孺む者をや。字を分かち詩を賦す、要は一時の情を写すに在り、必ずしも工を字句の間に争わず。随い成れば随い録し、歯を序して輯めて小巻と為し以て二子に贈るに遑あらず。乃ち蘭亭の文に倣い、其の姓字を列叙し以て後の覧る者に伝えん。

（注）＊王右軍…書家で有名な晋の王羲之のこと。王羲之が名士と蘭亭で曲水の宴を催した時、作った詩集の序を「蘭亭集序」と言う。履軒はこの文章から字句を拾い組み合わせている。以下の傍線部を参照。

雖無糸竹管絃之盛、一觴一咏、亦足以暢叙幽情。…足以極視聴之娯。信可楽也。…向之所欣、俛仰之間、以為陳迹。不能不以之興懐。…故列叙時人、録其所述。…後之覧者、亦将有感於斯文。

＊和楽…『詩経』「小雅」「常棣」に「兄弟既翕、和楽且湛」とある。

（訳）曲水の宴を楽しんでも、すぐに過去のものとなる。それが王羲之が感懐を催し（「蘭亭集序」を書い）た理由である。今、我らが君彝と弟の処叔とが京都に遊学するに際し、諸子が、文と酒とで別れを叙し、努めて引き留めようとするのはもっともなことだ。まして、私のように、同じ腹から生まれ、仲良く育ってきた者は言うまでもない。韻を分け合って詩を賦すのは、大事なのはその時の情を表現することであって、言い回しがうまいかどうか争わなくてもよい。できた順番に記録したもので、年齢順に並べて巻物とし二人に贈るには余裕がなかった。そこで、「蘭亭集序」に倣い、その姓名を列挙して、後世に見る人に伝える。

正誼、字子和、号春楼、三宅氏。辨之、字士誉、号淡水、早氏。喬、字伯遷、号松山、荒木氏。光同、字子淵、号西海。相如、字正民、号槐菴、古林氏。景範、字子常、号竹里、加藤氏。存之、字子希、号蓮峰、原氏。素房、字子絢、号商山、竹島氏。元永、字子貞、号松宇、金崎氏。

正誼、字は子和、号は春楼、三宅氏。
辨之、字は士誉、号は淡水、早氏。
喬、字は伯遷、号は松山、荒木氏。
　　＊松山は正しくは商山。
光同、字は子淵、号は西海。
　　＊三宅氏。上記春楼の子。
相如、字は正民、号は槐菴、古林氏。

景範、字は子常、号は竹里、加藤氏。
存之、字は子希、号は蓮峰、原氏。
素房、字は子絢、号は商山、竹島氏。
＊商山は松山の間違い（〈考察〉参照）。
元永、字は子貞、号は松宇、金崎氏。

（訳）略。

（考察）以上、荒木喬の号に松山と言い、竹島素房の号に商山と言うが、正しくは入れ替えるべきだと思われる。『奠陰集（文集）』巻七「与紀世馨」に「荒木伯遷名喬、以商山自号者」とあり、荒木喬の号は商山だと確認できる（他、『懐徳堂考』上六〇頁、下四五頁、『池田人物誌』下）。『奠陰集（文集）』巻四「懐徳書院会餞詩序」では、両者とも商山と書き、荒木喬の商山を見せ消ちし松山に直している。訂正箇所を間違えたのであろう。

有約不来者数人、闕之。曰子和、為書院教授。曰子淵、子和之嗣。曰子絢、曰子貞、受業於子和。曰子常、曰伯遷、受業於吾先子。曰正民、予姨弟。曰士誉、曰子希、従予而游。予、字子慶、号竹山、中井氏、実助教於書院云。

明和丙戌十一月

積善識

（印）「積善之印」（印）「号竹山」

約有りて来ざる者数人、之を闕く。子和と曰うは、書院教授為（た）り。子淵と曰うは、子和の嗣たり。子絢と曰い、子貞と曰うは、業を子和に受く。子常と曰い、伯遷と曰うは、業を吾が先子に受く。正民と曰うは、予が姨弟なり。士誉と曰い、子希と曰うは、予に従いて游ぶ。予、字子慶、号竹山、中井氏、実に書院に助教たりとしか云う。明和丙戌（一七六六年）十一月

（校勘）『奠陰集（文集）』巻四にも「懐徳書院会餞詩序」があるが、以下のように若干の文字の異同がある。
＊輯為小巻→積為小巻。＊倣蘭亭之文→倣蘭亭故事。＊号西海→号西海、三宅氏。＊素房、字子絢→久道、字士方。＊商山→松山（見せ消ち）。（＊『懐徳堂遺書』本　字子貞→字子員・・・誤植。）＊曰子絢→曰士方。＊受業於吾先子→及吾先子之門。

（訳）約束していて来なかった人が数人おり、その分は

欠く。子和は、書院教授（学主）である。子淵は、子和の跡継ぎである。子絢・子貞は、子和の弟子である。子常・伯遷は、私の父の弟子である。正民は、私の母方の従兄弟である。士誉・子希は、私の弟子である。私は、字は子慶、号は竹山、中井氏である。書院の助教（預かり人）をしている。

（付録）

「孤雁歌　送処叔弟之京」（『奠陰集（詩集）』巻二）

（孤雁の歌　処叔弟の京に之くを送る）

鴻雁天性善成行　鴻雁　天性　善く行を成す
万里聯翩水雲郷　万里　聯翩　水雲の郷
一朝底事離伴侶　一朝　底事か　伴侶を離れ
単影相失天一方　単影　天の一方に　相い失う
郊原絡繹多矰繳　郊原　絡繹として　矰繳多く
村落蕭条少稲粱　村落　蕭条として　稲粱少なし
栖集攸啄難容与　栖集し　啄む攸　容与し難し
驚起哀鳴分背翔　驚起し哀鳴し　分背して翔ぶ
白雲慘澹華山月　白雲　慘澹たり　華山の月
紅蓼摧残洛水霜　紅蓼　摧残す　洛水の霜
相喚相求不相識　相い喚び　相い求め　相い識らず
華山洛水両茫々　華山　洛水　両つながら茫々

（校勘）『懐徳堂遺書』本は「白雲」を「白霊」に誤る。

（注）＊水雲郷…『奠陰集（詩集）』巻三に見える。
＊紅蓼…『奠陰集（詩集）』巻一「訪友人別墅」、巻四「賦孤雁得孤字」に見える。共に「紅蓼洲」。＊相失天一方…杜甫「孤雁」に「相失万重雲」という句がある。
＊容与…ゆったりすること。『楚辞』に多く見える語。

（訳）雁は生来よく飛び、水国の郷で万里に羽ばたく。ある朝、どうして仲間を離れ、独り天の片隅に見えなくなるのか。郊外の草原は果てしなく罠も多く、村は閑散として餌は少ない（いずこも住みにくい）。生活するにもゆったりできず、驚き起きて悲鳴をあげ、別れて飛び立つ。白雲は華山の月の下に色褪せ、紅蓼は洛水の霜の下に枯れ凋む。呼び合っても見つけることができず、華山（大阪を喩える）と洛水（京都を喩える）の両地で茫然とする。

嗟弟与汝竹馬遊　嗟　弟　汝と竹馬の遊
蛍雪冠昏長聚頭　蛍雪　冠昏　長く頭を聚む
無那不才且不幸　那んともする無し　不才　且つ　不幸
旧業崩墜百事休　旧業　崩墜し　百事休む
下有妻子上慈親　下に妻子有り　上に慈親あり
不免衣食駆馳煩　免れず　衣食　駆馳の煩い

（訳）ああ、弟よ、お前とは竹馬の遊びをし、勉強も冠婚も共にした。私の不才と不幸はどうすることもできず、先人の事業を失墜させ、万事は休す。下には妻子、上には親を抱え、衣食のために奔走する煩いを免れない。

弟今一剣一書笈　弟　今　一剣　一書笈
飄然去游公卿門　飄然として去り游ぶ　公卿の門
汝亦類我多窮骨　汝　亦た我に類し　窮骨多し
只有豪懐倶砿硉　只だ豪懐有り　倶に砿硉
正路広居随処在　正路　広居　随処に在り
遮莫前程猶汨没　遮莫あれ　前程　猶お汨没
今夕匏尊叙離別　今夕　匏尊　離別を叙す
不須嘆貧収涙血　貧を嘆くを須いず　涙血を収めよ
但悼中道割門戸　但だ悼む　中道にて　門戸を割つを
為唱孤雁歌一闋　為に唱う　孤雁の歌一闋

（注）＊一剣一書笈…一つの剣と一つの書箱。文士の持ち物を言う。＊砿硉…硉砿で穏やかでない様。また、豪放な様。両字とも月韻なので、韻のために入れ替えたのではなさそうである。＊正路広居…『孟子』「離婁上」篇に「仁、人之安宅也。義、人之正路也」とある。また、『孟子』「滕文公下」篇に「居天下之広居、立天下之正位、行天下之大道」の朱子の集注に「広居、仁也」とある。＊汨没…水中に沈む。転じて、僻地に埋もれて世に出ないこと。

（訳）弟は今一つの剣と一つの本箱を持ち、飄然と去り公卿の門に遊学する。お前も私と同じく貧乏で、ただごつごつした豪傑の気象があるだけだ。仁義は至る所存在する。前途が期待できなくても気にするな。今夜、酒を酌み交わし別れの宴を開く。貧乏を嘆くな。涙を収めよ。ただ心残りは、中途で門を分かつことだ＊。お前のために孤雁の歌一曲を唱う。

＊竹山はこの京都行を履軒独立ととらえているようだ。全体を通じて、自分の不甲斐なさ、弟の出世を表現している。